



Title	樺太における郷土文化の形成と展開 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	鈴木, 仁
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第14179号
Issue Date	2020-09-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/80074">http://hdl.handle.net/2115/80074</a>
Rights(URL)	<a href="https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/">https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/</a>
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Jin_Suzuki_review.pdf (審査の要旨)



[Instructions for use](#)

# 学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：鈴木 仁

	主査	教授	白木沢 旭児
審査委員	副査	教授	権 錫永
	副査	教授	佐々木 亨

## 学位論文題名

樺太における郷土文化の形成と展開

### ・当該研究領域における本論文の研究成果

本論文の研究成果としては、まず、第一に、『樺太日日新聞』に掲載された記事を網羅的に調査し、樺太において、行われた文化活動を見事に再現したことが指摘できる。地方における文化活動を研究する際に、地方新聞は、恰好の資料であるが、数十年間の記事を網羅的に読み、活用することは多大な労苦を伴う。各種イベントの開催事実から、各施設の運営状況、文化人が書いた連載記事などすべて掌握して資料を活用したことは、大きな成果である。『樺太日日新聞』については、樺太庁と近い関係にあることから、樺太庁の事績を詳細に追っていくことに加えて、『樺太日日新聞』それ自体が樺太における文化活動の担い手であった。

第二に、樺太在住者の事績にこだわり、菱沼右一（新聞記者）、西鶴定嘉（中学校教諭）、葛西猛千代（郵便局長）、木村信六（警察官）、菅原繁蔵（小学校校長、博物館職員）、上田光曦（樺太庁師範学校長）、菅原道太郎（樺太庁中央試験所技師）、山野乙助（土建業）、知里眞志保（中学校教諭）、荒澤勝太郎（新聞社勤務、樺太庁嘱託）、山本利雄（建築家、博物館長）など、樺太における郷土文化を創造した人々を多数発見し、新聞記事はもとより、それぞれの人物について、該当する資料を見つけ出し、詳細に事績を明らかにしたことである。地方における文化活動は、人に規定される側面があり、キーパーソンを見つけ出して、その足跡を追いかける、という申請者の研究方法は、きわめて有効だったと評価できる。

第三に、当時の樺太島民が抱く歴史認識を検討したことである。その結果、樺太島民は、先住民族にも注目し、また、先住民族と大陸との関係にも関心をもっていたことが明らかにされた。もちろん、日本領有を正当化するべく、日本人探検家の業績や日露戦争での日本軍の軍功が顕彰される傾向はあったものの、それだけではなかったのである。樺太郷土会などは、アイヌ民族のチャシや住居跡、各種の遺物や出土品に関心を向けており、各地で保存の取り組みや独自の展示が行われていた。また、「先住民族」という言葉も当時の樺太では一般に用いられていたことがわかった。樺太領有後に地名を再設定する際にも、ロシア語地名は排除され、アイヌ語地名が多く採用された。アイヌ語をベースにしながらも日本風の表記に直そうとする北海道と比べて、樺太の方は、よりアイヌ語に忠実であった。その理由は、アイヌ語地名の存在が、対外的に樺太は日

本領であると主張する根拠になると考えられていたからである、と申請者は指摘している。

第四に、樺太における博物館は、1937年の新築開館にいたる前の歴史があり、樺太庁内や軍施設を用いながら、収集・展示の取り組みが続けられていたことを明らかにしたことである。樺太庁博物館には先住民に関連する出土品も多数収蔵されており、終戦後には山本利雄館長が残留し、ソ連側の博物館職員に引き継ぎ、現在（サハリン州郷土博物館）にいたるのである。本論文は、地方における博物館史としても貴重な成果であると評価できる。

#### ・学位授与に関する委員会の所見

口頭試問では、本論文に対する疑問点もいくつか出された。第一に、郷土文化をどう定義するのか、が示されていないこと、当時の日本全体で行われていた郷土文化運動とどのような関係にあるのか、隣接する北海道で盛んになる北方文化研究との関りはないのか、など樺太島外との関わりについて、言及がほとんどないことが指摘された。これに対して、申請者は、領有初期においては、島外の学者が様々な調査を行うが、その成果が樺太には反映されなかったこと、1930年代以降には樺太在住者による文化活動が定着する、という見通しを説明した。また、各章の結論が「小結」とされているが、不十分であること、終章が非常に短いこと、が指摘された。

このような課題が残されたが、口頭試問のなかで、欠点についても自覚的であり、いくつかは疑問に答えることもできたことから、むしろ今後の申請者の研究進展の可能性を示すものと考えたい。

以上の審査内容を踏まえて、本審査委員会は、全員一致して申請者・鈴木仁氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。